



徴古館報 第37号 2019年(平成31年)1月発行



色絵草花文洋食器 明治2年～20年代 有田大樽窯・平林伊平 作

「幕末明治の鍋島家 一大名から侯爵へ」



平成30年に明治維新から150年を迎えることを記念した「肥前さが幕末維新博覧会」が平成30年3月17日(土)から平成31年1月14日(月・祝)まで開催され、「幕末維新記念館」を主会場として佐賀県内各地で関連のイベントや展示が行われました。

その一環として、当館では鍋島家伝来品による上記特別展を開催しました。長崎港の警備などに力を注いだ幕末の10代佐賀藩主鍋島直正公の時代、そして11代直大公や栄子夫人が活躍した侯爵鍋島家の時代を中心に、直筆の手紙や愛用品などから、その人となりと鍋島家の歴史を広くご紹介しました。

会期中は佐賀藩精煉方製の蒸気車雛形や蒸気船雛形2点(いずれも県指定重要文化財)の他、11代直大公の肖像画(百武兼行筆)などを常設展示。また、初代藩主勝茂公が島原の乱で着用した具足(県指定重要文化財)や江戸時代を代表する武士道論「葉隠(山本本)」なども公開し、直正公が重んじた藩祖直茂公・初代藩主勝茂公の佐賀藩成立期の歴史をご紹介しました。また、会期中は約2ヵ月ずつ4期に分けて展示資料の入れ替えを行いました。

展示室の様子

第3期(8月25日～11月5日)



本展の広報物にも大きく掲載している11代栄子夫人所用の小袖地のドレスを展示。小袖の生地を、当時欧米で流行していたバスル・ドレスに仕立てた、類例の少ない貴重なものです。近年では、このドレスをモデルにした衣装が制作され、NHK大河ドラマ「花燃ゆ」の主人公や「さが維新まつり」(10月20日)で栄子様に扮した女優・三根 梓さん(嬉野市出身)が着用し話題となりました。



直大・栄子夫妻の肖像画と小袖地のバスル・ドレス

明治25年落成の鍋島邸西洋館(東京・永田町)で使用されていた有田焼の洋食器(表紙)も展示。スープ鉢やソース入れ、パン皿や肉皿、果物台鉢など全22種類が揃った本格的な一式です。カラフルな色絵と金彩で水仙・菊・柳・牡丹・菖蒲・梅などの草花が絵付けされており、注目を集めました。

第4期(11月6日～1月14日)



佐賀県内唯一の国宝「催馬楽譜」を10年ぶりに公開したことが話題となり、各メディアでご紹介いただきました。これは平安時代後期に書写された、古代宮廷歌謡のひとつ「催馬楽」の現存最古の写本です。温雅な筆致の万葉仮名で57曲が記されています。宮中の儀式や雅楽を掌る宮内省式部の長にあたる役職を13年間にわたって務めた直大公の時代に鍋島家にもたらされたと考えられるものです。



催馬楽譜(国宝) 右奥は直大・栄子夫妻の仮装舞踏服

明治20年に伊藤博文首相官邸で開催された仮装舞踏会で直大・栄子夫妻が着用した舞踏服も好評でした。また、直正公の正室 盛姫所用の香割道具や継室 華姫所用の行器をはじめ、吉祥尽くしの意匠の蒔絵が施された漆塗の調度、総刺繍の小袖など、新春に相応しい和の品々も並びました。

総括と展望

「肥前さが幕末維新博覧会」の一環として開催した特別展を総括し、その他の近年の活動を含め今後を展望したい。

年間を通した特別展

今回の特別展では、例年、2ヵ月間程開催する企画展前後の時期に設けている休館期間を設定しなかったこともあるが、当館への来館者は例年の同時期の約6倍にのぼった。これは県を挙げた大規模イベントゆえの広報効果や回遊性に拠るところが大きい。

当館は展示室が一室のみであるため、企画展の中で関連の収蔵品をフルに展示できない場合が多いが、10ヵ月間を4期に分け随時展示替えしたこと、また2階フロアを改築し展示スペースを増床したことにより出品件数も確保できた。中には、篤志看護婦人会会長を務めた栄子の制服や看護服をはじめ平成10年の再開から20年目にして当館初公開となるものや、約20年ぶりに公開の「瓢兮歌」(徳川斉昭・藤田東湖筆)など、久方ぶりに注目を浴びたものもあった。

特別展のコンセプト

時代は江戸から明治へ、鍋島家は大名(佐賀藩主)から侯爵となった。時代と立場の変革期において鍋島家は、大名となった頃、つまり佐賀藩成立期の歴史や、近世を通じて培われた特有の質実剛健の家風を拠り所のひとつとした。そこで本展では、幕末明治期における10代直正公・11代直大公を中心に据えつつも、その個人としての社会的な業績を示すことのみに主眼を置かず、鍋島家という家族の一員であり、鍋島家という歴史を担う一員であると捉えた。

例えば第2期展では、慶応4年(1868)佐賀藩兵の上野戦争参戦を扱った。直大公が藩兵を率いたことと共に、同時期に姉の貢姫が江戸の世情不安を避け佐賀に帰郷したこと、その道すがら横浜で弟直大と会い、在京中だった父直正とは京都で5年ぶりに再会し、大坂からは蒸気船で藩領伊万里に着き、23年ぶりの佐賀帰郷を果たしたことも紹介した。参戦の弟は関東へ、政治参加の父は京都、娘は安定的な暮らしを求め郷里へという、交錯する動きを複合的に示すことで同時期の家族間のつながりを確認した。

銅像の建立と地方紙での連載

さて、平成29年には直正公銅像が佐賀城二の丸跡に再建され、平成30年には佐賀藩士で、のち開拓判官を務め札幌開府に着手した島義勇の銅像も建立された。その設置場所は直正公銅像との関連を考慮して西御門橋とされた。また佐賀駅と博覧会メイン会場の城内エリアを結ぶ中央大通り沿いには、幕末明治期を中心に活躍した佐賀



建立された島義勇の銅像

の偉人の銅像型モニュメント25体が佐賀県により設置された。これにより、郷里が生んだ歴史上の偉人の姿に、日常的に触れることができる環境が佐賀城内や城下という歴史的な地域に加速度的に整った。

歴史上の人物が銅像という恒久的な姿で、しかも人通りの多い都市中心部に鎮座するのは喜ばしい。ただ、その反面、現地の簡便な解説板のみでは、人物の特定の側面のイメージばかりが固定化される恐れも否めない。

こうした中、平成30年12月までの2年間にわたり、当館監修のもと佐賀新聞紙上に「閑叟公からの手紙」(23回)が連載された。これは直正公(閑叟公)が貢姫に宛てた自筆の手紙192通(当館所蔵)のうち、毎回1～2通ずつを紹介したものである。これにより、藩主としての側面とは違った、父として、家長として、あるいは全国的な有志大名としてなど、多角的な観点から人物像を照らし出すことができた。しかも地方紙という地域にとって普及性の高い媒体上で、毎回見開きの紙面を通じて広く一般に紹介される機会となった。

偉人にまつわる情報を県民が耳にする機会、お祭り期間である博覧会後は次第に減少し、歴史顕彰の気運は落ち着き始め、博覧会が与えた記憶や感銘は多くの来場者にとって時と共に薄らいでいくものである。博覧会を機に設置された銅像という姿や形は、都市中心部に今後に残る。彼らを多面的に理解する工夫や、取り残されたような存在にしない仕掛けが今後は求められるだろう。

組織的な観点からの人物顕彰

銅像が建てられるような「偉人」と呼ばれる藩主や著名な藩士のほかに、どのような人物や組織立てによって藩は運営されていたのだろうか。その全体像を明らかにすることは容易ではないが、当館を含む「さが城下まちづくり実行委員会」では平成21年度以降、佐賀城下エリアを対象として、当館の収蔵資料を用い、その掘り起こしに取り組んできた(次ページ参照)。7期分が現存する城下絵図や、城下武家地の土地台帳にあたる屋敷帳などの基礎資料を複製・翻刻出版し、また『佐賀城下法令史料集』として城下での暮らしぶりを示す資料をまとめてきた。

その後は、藩士が褒賞を受けた際の理由・内容・時期・人名などについてまとめた記録である「褒賞録」の翻刻を主に進め、来年度から出版に向けた編集作業に入る予定である。これは絵図や屋敷帳とともに、組織的な観点から地域の歴史上の人物を掘り上げ、関連の基礎的な収蔵資料を公開する作業である。特別展では、藩主(当主)を鍋島家という一家の一員として捉え、家に対する歴史意識を通じて「個人的な」業績を提示した。それと共に、褒賞録の公開により、鍋島家のもとに組織されていた藩士の存在を個人顕彰とは異なる角度で面的に捉える作業により、佐賀藩の城府である佐賀城下で活動した人物たちの足跡を、私たちのこれからの足掛かりの一つとしていきたい。

「古地図で佐賀城下の魅力再発見！」

当館が核となり、市民団体や佐賀県・佐賀市などと組織している「さが城下まちづくり実行委員会」。当館の収蔵資料を活用し、郷土の歴史を再認識し、今後のまちづくりに繋げることを目的として、平成21年度より「佐賀城下探訪会」の開催や佐賀城下絵図、藩士名簿等の調査・翻刻作業およびデータベース整備を進めています。

今年度の活動と今後の展望

今年度は例年4回開催してきた佐賀城下探訪会を実施しませんでした。2ヵ月ごとの定例会で来年度事業を協議すると共に、構成団体間での情報共有を深めました。また佐賀市が進めている歴史案内板の設置事業では、引き続き実行委員会が協働して原稿執筆や検討会を重ねました。さらに城下東の入口にあたる牛島構口の公園整備や、県立病院好生館跡地の活用検討にあたり古地図の利活用が進むなど、実行委員会での蓄積が波及しています。



佐賀新聞 文化奨励賞受賞

11月2日、当館主任学芸員の富田紘次が平成30年度佐賀新聞文化賞のうち奨励賞(学術部門)を受賞しました。これは当館の収蔵資料を用いた鍋島家を中心とする佐賀藩史の調査・研究および普及活動を評価して頂いたものです。特に佐賀城下の研究や城下探訪会の実施は実行委員会の一員としての活動であり、多くの皆様の支えによるものです。12月19日には実行委員会の構成団体を中心としたメンバーが集い、喜びを分かち合うとともに今後に向けて親睦を深めました。



展示案内

「鍋島家の雛祭り」展

平成31年2月11日(月・祝)
～3月31日(日)

毎年恒例の「鍋島家の雛祭り」展を開催します。鍋島邸内での雛祭りの様子が写された古写真になった、長さ6mと5mの二つの大雛壇飾りに、明治から昭和初期の歴代夫人が愛しんだ雛人形・雛道具約500点が並びます。



雛人形・雛道具の修復

雛人形・雛道具にとって、経年による劣化に加え、毎年展示することによる負担は避けられません。この度、12月8日から4日間の日程で、人形修復家・新井榛名氏に修復を行っていただきました。

11代直太夫人栄子様や13代直泰夫人紀久子様所用の雛人形や雛道具、当館で保管・展示を行っている小城鍋島家伝来の古今雛(佐賀市所蔵)などが対象となりました。顔の胡粉の細かなひび割れや剥落等も慎重に繕われ、再び美しく安定した状態となった御人形・御道具類を、本展でお披露目いたします。

今回の特別展示

今年は侯爵鍋島家伝来の「ボンボンニエール」も特別に展示いたします。ボンボンニエール(Bonbonnière)とは、金平糖などの砂糖菓子(Bonbon)を入れる小箱のこと。明治時代以降の日本では、おもに皇室や皇族、華族における御成年式や御結婚式といった慶事の際、引出物として出席者に配られました。直径5cmほどの丸形、花形、桃や扇、兜形の銀製のもの、玉手箱のような漆塗のものなど、有職や吉祥にちなむ文様や形を中心とした多様な意匠も見どころです。



徴古館報 第37号 2019年(H31)1月発行

公益財団法人 鍋島報効会

〒840-0831 佐賀市松原2丁目5-22

TEL・FAX (0952) 23-4200 MAIL info@nabeshima.or.jp

URL http://www.nabeshima.or.jp